

平成  
6年  
～  
10年

1994～1998



1996年2月1日モモンガを村獣に指定

## パラグライダー初体験

アドベンチャースクール

上浮穴郡面河村若山の面河少年自然の家(中川伸二所長)で、八月二十二日から二十四日までの二泊三日の日程で「アドベンチャースクール」が開かれ、県内外から小学生約三百人が、野外キャンプやパラグライダーなどにチャレンジした。

「トムソーヤスクールin面河」と名付けた同教室には、松山市内のほか、高知・香川などの近県からも参加。二つのグループに分かれ、テント設置後、野外炊飯やクラフト教室などに取り組んだ。二日目は、面河川でカヌーに、面河第一小グラウンドでパラグライダーにそれぞれ挑戦した。

パラグライダー教室は、インストラクターの指導で、児童がキャノピーと呼ばれる長方形のパラシュートを背負ってグラウンドを走り、わずか数十秒の「低空飛行」ながらも、初体験を楽しんでいた。  
(平成9年8月27日)



パラグライダーに挑戦する小学生

## さあ、飛び立とう

2年生全員9人が決意

「さあ、飛び立とう大空へ」——上浮穴郡面河村・面河中学校の少年式が二月十七日あり、二年生九人が「十四歳の節目」を誓った。

少年式は当初、四日に予定していたが、インフルエンザ流行のため延期になった。式典では中野校長が「風雪に鍛えられて人は強くなる。どんな時もなくけず頑張つてほしい」と激励。三年生の土居杏奈さんが「面河中の伝統を引き継ぎながら、二歩二歩自分の道を歩んでください」と述べ、教職員全員が「はなむけの歌」を斉唱した。

二年生二人一人が「挑戦」「大志」「友情」など、それぞれの思いを託した書を掲げ、決意の言葉を述べた。最後に二年生全員で作った学級歌「夢に向かつて」を力強く歌った。

式典の後、記念の餅つき大会などがあり、PTAも参加して、地域ぐるみで節目を祝った。  
(平成10年2月19日)



それぞれの目標を掲げる面河中学2年生の9人

## 太鼓で交流広げる

「祇園」と「天狗」打ち比べ

郷土芸能の輪を広げようと、上浮穴郡面河村  
 洪草の住民センターで四月十二日、地元「石鐘  
 天狗太鼓」と大洲市八多喜の「栗津祇園太鼓」  
 が初めての交流会を開き、互いの演奏を披露して  
 親ぼくを深めた。

石鐘天狗太鼓は平成元年に始まり、石鐘山  
 の山開きの際にも演奏。栗津祇園太鼓は同四年  
 に発足、地域に根付いた演奏活動を続けている。

交流会は、石鐘天狗太鼓保存会の増田寿幸会  
 長(四三)と栗津祇園太鼓の津田豊二さん(四〇)の呼  
 びかけで始まり、同日は中学生から四十九歳まで  
 のメンバーが参加した。

両グループは今後も定期的に交流を続ける予  
 定で、増田さんは「今後、県内太鼓グループの交流  
 の輪を広げていきたい」と広く参加を呼び掛け  
 ている。  
 (平成9年4月16日)



太鼓演奏で交流を深める参加者

## 「恋い来いマドンナ」

過疎対策、お見合いパーティー

村の青年に「出会い」の場を作ろうと、上浮穴  
 郡面河村でこのほど、二日間にわたって「恋い来い  
 マドンナ in おも」<sup>(一)</sup>と銘打ったお見合いパーティ  
 ーが開かれ、松山市などから独身女性三十五人  
 が参加して、交流を深めた。

同村は人口約千五十人で過疎化が進んでいる。  
 パーティーは後継者対策の二環として、村のバックア  
 ップを受けて商工会青年部(大西幸弘部長)が初  
 めて企画した。村内からは二十代以上の独身男  
 性十四人が参加した。

募集方法も「面河へ永久就職を」との気持ち  
 を込めて、松山市内の求人情報誌に広告を掲載。  
 このユニークな呼び掛けに二十代から三十代前半  
 までの会社員や学生など幅広い層が集まった。  
 (平成9年9月18日)



飯ごう炊飯で交流を深める参加者

## 鬼も退散、大草履

家内安全願い川につる

上浮穴郡面河村で十六日、伝統行事「鬼の金  
 剛」が行われ、地元住民が大草履を川につるして、  
 二年間の家内安全を願った。

小正月に行われる行事で、約二百年前から続  
 くといわれる。かつては村内各地で見られたが、  
 人口減少に伴って現在は、洪草の土泥、中里成、里  
 成の各地区と若山の中ヶ市地区の四カ所だけに  
 伝わっている。

「鬼の金剛」は、鬼の侵入を防ぐため、魔よけの  
 大草履と、鬼が食べる弁当、十六善神にちなんだ  
 箸十六組を地区の入り口の川をまたぐようにつ  
 るす。また弁当の中には、石とご飯を詰め、鬼が  
 石を食べて「固い」とびっくりして退散するとい  
 われている。

里成地区では、二十代から八十代の男女約三  
 十人が集会所に集まり、縄をなつた。草履作り五  
 十年以上のキャリアを持つ高岡政盛さん(八三)は  
 「形を整えるのが一番難しい」と言いながら若者ら  
 に指導していた。  
 (平成9年1月18日)



割石川に草履を取り付ける里成地区のお年寄り

## 生育祝い「拔穂式」

宮中新嘗祭に献上のアワ

宮中の新嘗祭に献上するアワの「拔穂式」が九月十四日、上浮穴郡面河村相の峰であり、献穀者の農業菅光義さん（五）がアワを刈った。

菅さんは約四カ月前、畑二アワにアワの種をまき、背丈ほどに育った茎の先に、赤茶に実った穂がこうべを垂れている。式典には県や同村関係者十人が参加。畑で神事があり、菅さんが収穫するアワの最初の一株を刈り取り、祭壇にささげた。このあと、参加者全員が、玉ぐしをささげアワの生育を祝った。同日は、米の献穀者となっている柳谷村中津、農業西野剛二さん（六）方でも、刈り取りがあった。（平成7年9月15日）



刈り取ったアワを祭壇に納める菅さん

## 万歳など児童熱演

上浮穴郡面河村の「ふるさとまつり」（村教委など主催）が十一月九日、同村洪草の村住民センターで開かれ、郷土芸能や特産品即売会など多彩な催しに、村内外から大勢の人が訪れた。まつりは今年で二十回目。毎年、面河村同郷会（松本道正会長）ら、松山市などを中心に村外在住の村出身者も参加し、郷土の発展を願って交流を深めている。

今年のテーマは「見直そう我がふるさと」の面河村」。開会行事に続く発表会では、洪草小児童による石鎚天狗太鼓、面河第二小児童の「面河万歳」、洪草獅子舞保存会による獅子舞「まございさん」などの郷土芸能が披露され、会場を訪れた人々は、児童の懸命な演技に目を細めていた。（平成9年11月11日）



郷土芸能「おもご万歳」を披露する面河第一小児童

## 古里の夏の夜楽し

帰省客ら参加し納涼大会

上浮穴郡面河村笠方の面河ダム湖周辺でこのほど「第十二回ふるさと面河納涼大会」が開かれ、帰省客ら約千八百人が夏の夜を楽しんだ。

例年は同村洪草の面河中学校グラウンドで実施していたが、同ダム湖の周辺整備が来年三月完成に向けて着々と進んでいることから、今回初めてダム湖畔を会場に選んだ。

「石鎚天狗太鼓保存会」の演奏に続き、盆踊り大会や福引大会などのイベントが繰り広げられ、特設ステージを囲んで、浴衣姿や法被姿の踊り連が繰り出した。フィナーレは約五百発の打ち上げ花火が、石鎚山ろくの澄み切った夜空を焦がし、村民たちはふるさと祭りを夜遅くまで満喫した。（平成9年8月22日）



多彩なイベントでにぎわった面河納涼大会

## 石鎚神社で「天狗太鼓」

石鎚山お山開き期間中の四日、上浮穴郡面河村土小屋（二、四九二）の石鎚神社土小屋遙拝殿前で、同村の青年太鼓グループ「石鎚天狗太鼓保存会」（増田寿幸会長、二十一人）の奉納演奏があり、多くの参拝客らを魅了した。同保存会は平成元年に結成、村内外で活躍している。奉納演奏は、登山客の安全を祈願する恒例行事。

同日は、女性三人を含む十五人のメンバーが、お山開きの風景を象徴した「登山」「御神体」、山から木を切り出す情景を模した「筏流し」、石鎚山に訪れる本格的な夏を表現した「嵐」の四部構成の曲目を、約二十分間にわたって演奏した。

迫真の演技に、遙拝殿前に詰め掛けた白衣姿の参拝客や登山客らは惜しめない拍手と歓声を送っていた。

（平成10年7月6日）



天狗にふんした打ち手らが激しく舞った、石鎚天狗太鼓保存会の奉納演奏

## 太鼓そろい踏み

面河でフェスティバル

上浮穴郡面河村の石鎚天狗太鼓保存会が、結成十周年を迎えるのを記念して、県内各地域の太鼓グループが一堂に集う「魂の響き〜おもご太鼓フェスティバル」がこのほど同村洪草の村民体育館で開かれ、大勢の観客を魅了した。

同保存会は、地域おこしの一環として同村の若者を中心に平成元年に発足した。以後毎年、石鎚山お山開きでの奉納演奏や、県内の太鼓保存会との技術交流会など、太鼓を通じた活動を展開している。同フェスティバルは、グループ同士の親交を深めようと今回初めて開催した。

石鎚天狗太鼓のほか大洲栗津祇園太鼓（大洲市）や柳谷八釜竜神太鼓（柳谷村）、小田喜鼓里太鼓（小田町）、久万山五神太鼓（久万町）、和太鼓集団鼓太朗（松山市）などが友情出演。それぞれに特徴のある演奏を披露して観客らを喜ばせた。

（平成10年11月21日）



力強い演奏で会場を沸かせた石鎚天狗太鼓保存会の演奏

## 求む！保健婦・栄養士

「卵」招き交流会

過疎地域の福祉人材不足に対応しようと、来春卒業予定の大学生を対象に、求人募集を兼ねた交流会が八月二十七、二十八の両日、上浮穴郡面河村であり、保健婦や栄養士の「卵」ら十三人が参加して、地元住民らと懇談した。

同郡では柳谷村で保健婦、栄養士がともにゼロ。面河村では保健婦が一人欠員と近年慢性的なマンパワー不足に悩んでいる。交流会は県地域医療課が過疎地を直接見学してもらおうと初めて企画。近県の福祉系学部を持つ大学に、パンフレットを配り参加者を募った。

説明会には、柳谷村、美川村、喜多郡河辺村の担当職員が参加し、求人募集を呼び掛けた。久万保健所の三木優子所長が郡内の現状を説明、郡内で働く保健婦や栄養士が業務内容や体験談を話した。参加者からは給与体系や待遇面についての質問が出された。

地元自治体は面河山岳博物館などを案内したり、瓶ヶ森でハイキングをしたりと、村の特徴をPR。夜は面河村青年団との交流会も。

(平成9年8月1日)



懇親会で地元青年団らと交流を深める参加者

## 既存施設を活用

サテライト型デイサービス事業スタート

上浮穴郡面河村は、身体が虚弱な在宅のお年寄りを対象に、村内各地域の既存施設を活用したサテライト型デイサービス事業を二日から開始した。

同事業は、福祉施設以外の集会所や公民館などをサテライト(衛星局)として利用し、特別養護老人ホームなどを運営する社会福祉法人の職員らが出向いて、健康診断や給食などのサービスを提供する「出前」方式のデイサービス。福祉施設整備の遅れをカバーし、集落が点在する過疎地域の送迎負担などを軽減できる。同方式のデイサービス導入は、同郡内では初めて。国・県の補助を受け、総事業費は約千三百五十万円。

村の委託を受けた上浮穴郡久万町の特別養護老人ホーム「久万の里」(社会福祉法人喜久寿)が、城山、中組、前組、浪草、笠方の各公民館、若山集会所の村内六カ所で巡回実施する。

(平成10年6月4日)



看護婦による健康チェックや健康相談を受けるお年寄り＝浪草公民館

## ナメコ栽培成功

全国初、針葉樹の間伐材使って

上浮穴郡面河村の農業後継者協議会は、針葉樹の間伐材によるナメコ栽培に取り組んできたが、量産のめどがつき、十一月上旬、市場に出荷する。針葉樹をほだ木にしたナメコは、全国でも初めての実用化。メンバーは「商品価値のない間伐材を活用し、低迷している林業を活性化させた」と意欲を燃やしている。

「乾燥が早い針葉樹に湿度を加える」工夫で成功し、平成三年に発表した。同協議会は四年から実用化を目指し、試験栽培してきた。ほだ場（生産地）は寒暖差があり湿度が高い面河村本谷の山林（標高約七百メートル）。当初、ヒノキ六十本にナメコ二千個を植菌した。乾燥を防ぐため木の四分の一を地面に埋め、落ち葉をかけた。二年続きの湯水で、一週間に二度トラックで水を運びかん水もした。

こうした努力が実り、五年秋に約六キロ、六年十一キロと収量がアップ。ここ二年間はスギを加え、ほだ木も約三倍に増やし、今秋は二十二キロの収穫を見込んでいる。村営市場で販売する予定。

（平成7年10月17日）



天然物の風味と粘りがある面河産ナメコ

## ヘルシーな食品が目玉

ふるさと市・古里店 面河特産品開発センター

「緑色がきれいなえ」 「体にええんじやろねえ」 観光客らが土産物を物色している。景勝面河溪の入り口にある上浮穴郡面河村営の面河特産品開発センター（菅努所長）と面河ふるさと市。ヨモギを入れたコンニャクやうどんなどが目玉商品で、ヘルシーな山里の味覚が人気を呼んでいる。

七月二日の石鍾お山開きから十日間は恒例の「お山市」。軒を連ねた開発センター、ふるさと市に登山者らが次々訪れた。「お山市の十日間でコンニャクが三千五百丁、三百丁入りうどんが八百パック出ました」と大繁盛に目を細める菅所長。「渓谷のレストランや国民宿舎でも使ってもらって好評です」という。

ふるさと市のコンニャクには、ヨモギ入りと普通のものがあるが、土産にはヨモギ入りが人気。これは四国四県村おこし物産コンクールで、最優秀を受賞した特製のヨモギ粉が入っている。

同センターは昨年六月オープン。特産品開発に取り組んだが、スタッフ五人はいずれも素人だった。菅所長は「スタッフには村の年配の主婦がおり、山里の味、昔ながらのノウハウを取り入れたところがよかった」と振り返る。「コンニャクの原料は村内では賄えない。契約栽培も進めたい。農家と強いつながりを持つことで、少しでも過疎化に歯止めがかかればと願っています」と話している。

（平成6年7月20日）



特産品開発センターで作出した山里の味が並ぶ面河ふるさと市

## 新鮮さが自慢

村の特産品に

いよいよ夏到来。「愛媛の避暑地」面河溪に足を延ばそうと思っている人も多いだろう。目に、心にしみるような青葉と清らかな水音、風のおい。山の魅力は数々あるが、食の楽しみも忘れてはいけない。おすすめは、上浮穴郡面河村の特産「石鍬マイタケ」。コリコリした菌触りと豊かな香り、低カロリー・高タンパク、さらにながんの抑制効果まであるといわれる、話題のキノコだ。

マイタケはもともと、石鍬山系の深山にしか生育せず「幻のキノコ」と言われていた。旬は秋。名前には「おいしくて心が躍る」舞茸」との由来があるという。同村は村おこしの一環で、マイタケを特産品として売り出そうと計画。村内の希望者五人が昭和六十三年四月、「若山まい茸生産組合」を結成して栽培に乗り出した。

採れたてのマイタケは弾力があつて香りも強く、バック詰めになつて時間がたつたものとはひと味違う。価格面では、県外の大手生産者に太刀打ちできないが、新鮮さでは負けない。鍋の需要が伸びる十月十二月は生産が追いつかないほどという。しかし、量を調整しながらも一年中、切らず生産しているため、同組合に行けばいつでもみずみずしい生マイタケが買える。加工品として干しマイタケ、焼きマイタケも直売している。同村の「国民宿舍面河」でも、マイタケは必ずメニューに加えている。

(平成8年6月20日)



栽培室に並び出荷直前のマイタケ

## 「ふるさとの駅」完成

野外ステージや東屋備え

面河溪谷の入り口、上浮穴郡面河村相の木(双田野)の広場に、このほど野外ステージや東屋、トイレなどを備えた同村の「ふるさとの駅」(約二万平方メートル)が完成した。

広場には、すでに村のふるさと市場や特産品開発センターがあつたが、観光客が休憩できる「道の駅」にと拡充を計画。五年度から県のアグリトピア構想推進事業で補助を受け、二カ年がかりで整備していた。

野外ステージ(高さ二メートル、広さ三十平方メートル)は石組み。トイレ棟は、ハーフログ造り(約八十平方メートル)で十一人が利用でき、中央に身障者用トイレ室もある。六角造りの東屋の中央にはパーキユー用の六つの窯、周囲に洗い場やベンチもある。また、広場裏の面河川まで公園化。大型バス四台と乗用車七十台を収容する駐車場も造つた。

(平成7年2月26日)



雪深い「ふるさとの駅」に完成したハーフログ造りの豪華トイレ



## 画題は豊富

スケッチキャンプ

「第八回地域を描く美術展」(県地域美術展協会など主催)のテーマ地・上浮穴郡面河村で八月二十二、二十三の両日、スケッチキャンプが開かれ、県内外から約百人の美術愛好家が参加、村内各地で制作活動に取り組んだ。

スケッチキャンプは、テーマ地の風物などを広く紹介し、参加者同士の交流を深めようと開催。近代日本美術協会四国支部長の渡辺祥行さんらが指導に当たった。

大阪、奈良など関西方面からの参加者も多く、学生から七十代のベテランまでが集まった。役場前での開会式では、主催地の脇本武雄村長が「面河村のよさを制作活動を通じて広くPRしてください」とあいさつ。参加者らは早速マイクロバスなどで紅葉河原周辺や石鎚山、面河ダムなど希望のポイントに分散して、熱心に絵筆を走らせていた。(平成10年8月27日)



面河の自然を画題にスケッチに取り組み参加者

## 石鎚舞台に伝奇ホラー

映画「死国」面河ロケ

来年新春公開予定の映画「死国」(長崎俊三監督、東宝配給)のロケが十二月十二日、上浮穴郡面河村の石鎚スカイライン(若山―土小屋)などであり、主演の夏川結衣さんらが撮影に取り組んだ。

「死国」は、高知県出身の直木賞作家板東真砂子の伝奇ホラー小説で、高知県の山村が舞台。古くから語り継がれている因習や伝承をベースに、人間が持つ生への執着や執念を描き、じわじわと深層心理に訴えるような恐怖を呼び起こす。原作では、石鎚スカイラインや土小屋なども登場、石鎚山が重要な舞台として描かれている。

ロケは同日、瓶ヶ森周辺や石鎚スカイラインの標高約千三百メートル付近で、約四十人のスタッフや夏川さんらが参加して行われた。天候に恵まれたが冷え込みが厳しい中、夕暮れ時まで続き、スカイラインを通過する観光客らも、撮影風景を珍しそうに眺めていた。(平成10年11月15日)



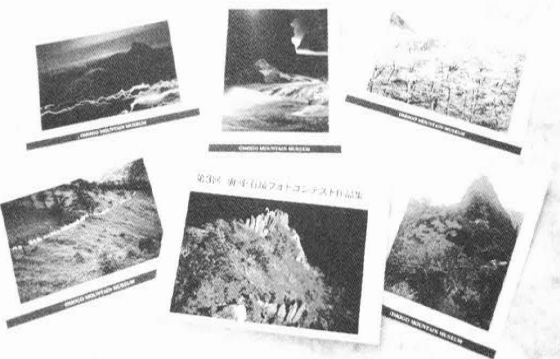
石鎚山を背景に、撮影に臨む主演の夏川結衣さん(左から2人目)ら

## 入賞作品、絵はがきに

山岳博物館などで発売

上浮穴郡面河村はこのほど「第三回面河・石鎚フォトコンテスト」の入賞作品を絵はがきに収めた作品集の発売を始めた。

フォトコンテストは、同村の自然や風物を再発見しようとして平成四年度から始まった。第三回コンテストは今年二月に審査があり、応募総数二百七十五点の中から入賞作品三十四点を選んだ。絵はがきは、入賞作品の中から十二点を厳選。千部を発行した。面河山岳博物館や村内の観光施設などで、二百五十円で発売中。紅葉に染まる柱状尾根、石鎚山頂の夕景、霧氷の木立、かれんなアケボノツツジなど、カメラでとらえた美しい風景が楽しめる。(平成10年12月4日)



優秀作品を集めた面河・石鎚フォトコンテスト絵はがき



石鍾国定公園指定40周年記念式典



面河溪谷の関門に建てられた「猿飛佐助発祥の地」記念碑

「猿飛佐助」発祥の地

面河に記念碑建立

今治出身の作家 溪谷思い出し創作

大正期の大衆小説で活躍したスーパースター猿飛佐助の記念碑が、十月二十五日、上浮穴郡面河村の面河溪谷に完成した。同村主催の石鍾国定公園指定四十周年事業の一環として建設された。十一月二日、除幕する。猿飛佐助は架空の忍術使いで、真田十勇士の一人。大衆文芸「立川文庫」の明治四十四年から大正末期までの間に二百点紹介された作品群の一つで、「世を風靡した英雄」だった。生みの親は作家の故池田蘭子さん（今治市山方町）。面河溪谷の猿飛谷や猿飛橋を思い出しながら「創造」した、と愛媛新聞のコラム「四季録」（平成二年十二月十二日付）で紹介されたのが縁で碑が建てられた。

同村は、国定公園指定四十周年の節目に「夢を後世に伝えよう」と記念碑の建立を計画。梅木正教育長が同文庫から史料の提供を受け、発祥の地で間違いなくことを確認。文化庁に趣意書を添え建設伺を申請し、九月五日認可を受け建設した。

記念碑は、猿飛谷から約三百メートル下った面河山岳博物館前に建てた。西条の青石（縦横約一・七メートル）に「猿飛佐助発祥の地」と刻み、由来を銅板プレートに刻んでいる。

式典では中川鬼子太郎村長らが除幕。国定公園を守った自然保護団体に感謝状を贈呈した後、松山東雲短期大学の森川国康学長が記念講演する。中川村長は「英雄発祥の地を全国のファンに伝えたかった。名勝地面河や石鍾山を訪れた良い思い出になれば幸いです」と話していた。

（平成7年10月26日）

## 流域50万人の生活潤す

渇水時には県都支援

西日本最高峰の石鎚山(標高一、九八二<sup>メートル</sup>)南嶺に源を発し、愛媛と高知を縦走後、太平洋へと注ぐ仁淀川。その源流の森は太古から脈々と生命の鼓動を刻んでいる。このほど全国「水源の森」百選のひとつに指定された。

石鎚山と北西の西ノ冠岳(一、八九四<sup>メートル</sup>)を結ぶ尾根筋の面河村側にあり、頂上付近にササ原、その下は原生林に覆われている。源流の沢を指すには、石鎚スカイライン終点の土小屋から石鎚山登山道を経て、二の鎖と三の鎖の間から二ノ森方面に分かれて下るルートと、面河溪から登る二つの道がある。

ブナ、ウラジロモミ、ダケカンバ、ナナカマド、シラベ、ヒメシヤラ。一帯は厳しい環境にあり、石鎚山系で一番早く紅葉する。アナグマやコマドリなどの森の動物が生息。日照りを知らない豊かな水源は、サンショウウオもはぐくむ。「人が誕生する以前の生息者ですよ」と面河山岳博物館の岡山健仁学芸員。両生類の観察に欠かせないフィールドだ。



石鎚山南嶺の「水源の森」を観察するハイカー

また沢には日本の滝百選の二つ、御来光の滝が三段、百<sup>メートル</sup>の落差をつくっている。愛大小屋(一、六五〇<sup>メートル</sup>)から三百<sup>メートル</sup>下った渓谷に滝つぼをつくり、ごう音を響かせている。谷水は、やがて番匠谷から面河溪を通り、面河川から仁淀川に合流して高知に入り、流域五十万人の生活を潤す。

愛媛側には、面河溪の集水堰(せき)から「面河ダム」＝同村笠方＝へと水運び、道前道後平野に農工業用水を送っている。昨年の大渇水の際、急きよ生活用水に転用。いつときだが、水不足に泣く松山市民を救ったことは記憶に新しい。

「都会人は水源の村に理解を深め、緑を守るために協力してほしい」と、中川鬼子太郎村長は山村が果たしている役割を力説する。昭和五十二年「自然保護宣言村」を提唱したのを機に、石鎚山系の環境保護と、その利用法を模索し続けている。

(平成7年9月2日)

## 川に魚を呼び戻そう

上浮穴郡面河川水系に、毎年アユやアマゴを放流している面河川漁協（組合員約千八百人）は、環境保全を目指し、四年八月に「面河川水系の清流を守る会」を結成した。郡内の各町村や四国電力の財政的支援も取り付け、河川清掃や環境教育などの活動を展開している。

同漁協組合長で同会長の森岡惇（むの）さんは「魚がすみやすい環境づくりを訴える。ところが近年「今年は大きなアユを放流したと言うけん、楽しみに川に行ってみたらおらんよ」——こんな話がたびたび聞かれるようになったという。

同漁協九年度総会での報告書によると、アユが「いなくなる」大きな原因には▽水温が二〇度以下の時▽河川の水の工事などによる汚濁▽ケイソウなどアユの餌の不足——があるとされる。このほか農薬と洗剤の影響などを挙げ、魚は有害物質の濃度が高いときはもちろん死ぬが、ごく微量時には危険を感じて忌避行動を取る、つまり「いなくなる」。

報告書は訴える。「人間の目で見えた状態では、農薬でも洗剤でも、河川の中ではほとんど清流にしか見えない」

河川の水質だけでなく、河川敷の汚れも目立つ。毎年夏には会員が「ローラー作戦」で水系一帯のごみを回収するが、心ない釣り客やキャンプ客の残していくごみには目を覆うばかり。「ひどい時にはキャンプで使った布団をそのままごみにして置いて帰る人もいる」と嘆く。

同会では今後も各家庭向けに、生活雑排水処理の講習などを実施していく。会長は「清流を守ることは、面河川の恩恵を受けるすべての人の責任。面河川にまた来てもらえるよう、みんなが協力してほしい」と呼び掛けている。

（平成10年2月10日）



面河川のごみや流木を拾い集める会員ら＝美川村上黒岩の御三戸遊園地

## 絶滅阻もう

モモンガ村獣に指定

村の大自然を守ろうと、上浮穴郡面河村はこのほど、空飛ぶ森の先住動物「モモンガ」を村獣に指定した。モモンガは夜行性でリスによく似た愛くるしいほ乳動物。木の実や昆虫を食へ昼間は木の洞穴に潜む。同村では「コモマ」と呼ばれ、その昔は普通に見られ村民に可愛いがられていたが、戦後、原生林の伐採により減少している。レッドデータブック(絶滅の恐れがある野生動物)にも希少動物として載せられている。このモモンガ、同村では久しく見られなかったが平成四、五年と続けて面河山岳博物館(菅盛幸館長)のロビーや駐車場に迷い込んだ。

このことがきっかけで「村獣にして守ろう」と計画。昨年十月、同館が提案し、議会に報告した後、二月二日に指定した。県内の村獣指定は、隣村の美川村が指定している「ホンドリリス」に次いで二例目。同村は「今後、モモンガが住む自然豊かな村づくりをキャッチフレーズに、かわいいマスコットとして育てたい」と話している。

(平成8年2月6日)



面河村の村獣に指定されたモモンガ

## アユ5万6000匹放流

面河川漁協(森岡惇組合長)が三月二十八日、溪流釣りのメッカ・上浮穴郡仁淀川水系で今シーズン最初のアユ約五万六千匹を放流した。

放流したアユは体長五〜十センチ、重さ五〜十程度。同日の水温は八度で、例年より高め。同漁協組合員らが午前六時、美川村御三戸から約二キロ上流の面河川河原でバケツやホースなどで手分けしてアユを放った。

放流されたアユは重さ六十〜七十グラム、体長十七〜十八センチぐらいに育ち、六月一日に友釣り、八月二日には網とヤス漁がそれぞれ解禁になる。

同漁協では「今年は冬場が寒く、春は暖かい好条件で、成育に期待ができる」と話している。五月中旬ごろまでに琵琶湖産の稚アユ約五十万匹をさらに放流する予定。(平成9年4月1日)



アユを放流する面河川漁協組合員ら

## 面河溪谷、散策楽し

森林教室で7キロテクテク

森林とのふれあい教室(松山営林署、愛媛の森林基金共催)が五月三十日、上浮穴郡面河村の面河溪谷であり、松山市などから四十四人が参加して、森林浴を楽しんだ。

同教室は、国有林を探索しながら、森林の機能と重要性を広く理解してもらうのが狙いで、今年で八回目になる。二行は、午前八時に市駅前をバスで出発。関門から遊歩道を散策し、第一野営場から亀腹遊歩道を行き、国民宿舎面河に至るまでの約七キロのコースを約三時間かけて歩いた。

(平成10年6月2日)



樹木の名前をたずねて、散策する参加者たち「亀腹遊歩道」

## 赤い花？実はアカイカタケ

熱帯性の珍菌、県内5例目

上浮穴郡面河村でこのほど、熱帯性の珍しいキノコアカイカタケが発見された。県内では五例目で、同村では初めて。

発見者は同村若山、自営業菅政喜さん(七四)で、六月二十六日、自宅近くの山林で、見たことのない赤い冠状のキノコが二個あるのを見つけた。面河山岳博物館に連絡、同館の岡山健仁主任学芸員(三〇)とともに翌日再び二個を採集して調べたところ、アカカゴタケ科イカタケ属のアカイカタケであることが分かった。

アカイカタケは、熟すると多数の赤紅色の腕をイソギンチャクのように放射状水平に広げ、高さ五〜十センチになる。腕部に続く部分は広い皿状になっており、粘性のある黒褐色で悪臭を放つ。夏、秋に林内の腐植土などに生えるが、まれ。毒性はないという。

一九三五年に京都市鞍馬山で初めて発見されて以後、各地で採集されているが、ニュージールランド、スマトラ、ジャワなど、主として熱帯に分布するという。県内では、大洲市柳沢で初めて発見され、南宇和郡二本松町、上浮穴郡小田町などで確認されている。

(平成10年7月7日)



面河村若山の山林で発見された、珍菌「アカイカタケ」

## 守ろう小さな命の灯

ヒメボタル群生地 村の天然記念物に

上浮穴郡面河村教育委員会はこのほど、同村大成地区のヒメボタル群生地を同村天然記念物に指定した。

ヒメボタルは、成虫の体長が五・五〜十ミリの小型のホタル科甲虫。ヘイケボタルに類似するがやや小さい。胸前部は赤く、黒い紋が入っている。雌は後翅が退化。幼虫は巻貝を食べ、陸生する。ゲンジボタルやヘイケボタルのようにゆつくり発光するのではなく、小刻みに光るのが特徴。

日本特産種で本州、四国、九州に分布するが、発生期間は短い。雌が移動力を欠くことや近年の環境悪化などから生息は局地化され、現在県内で群生しているのは大成地区と南宇和郡西海町鹿島ぐらいとされる。

同地区では、標高約九百メートルの大成神宮周辺が群生の中心地。七月中旬ごろ、南北沿線約三キロにわたり、無数のヒメボタルが飛び交うのが見られる。昭和六十三年に地区民が群生を発見、群生地保護を続ける一方、村文化財保護審議会に天然記念物指定を申請していた。

(平成10年9月1日)



面河村大成地区のヒメボタル群生地で見られるヒメボタル

## 面河川の動植物紹介

上浮穴郡面河村若山の面河山岳博物館(脇本武雄館長)はこのほど、面河川の自然環境や生態系について小中学生向けに分かりやすく解説した副読本『面河川の生物と自然観察』を発刊し、郡内の小中学校や教育委員会、県内の博物館などに配布した。

同書はB5判四八ページ、オールカラーで二千部発行。執筆は、松山東雲短期大学の松井宏光助教授(植物編)、県自然観察指導員連絡会の山本栄治代表(観察・採集編)、新田高校の丹下彦教諭(野鳥編)、同博物館(は虫類、昆虫類編)がそれぞれ担当した。

面河川の動植物について、カラー写真やイラストなど約百八十点をふんだんに使用し、易しく紹介しているのが特徴。「河川水辺の観察・採集のテクニック」「木の名前を覚えてみませんか」「昆虫を探そう」など、自然観察からのアプローチを主題に、小・中学生のフィールドワークや自由研究の教材として活用できる。このほか、面河川の利水や面河川の変遷なども紹介、フィールドマップを添えた。

(平成10年3月24日)



カラー写真やイラストを使って分かりやすく面河川の自然を紹介